

## 名詞から副詞、接続詞へ

### The functional change of nouns to adverbs and conjunctions

三枝 令子

#### 要旨

もともとは格をとることができる名詞の「勢い」が、「滋子の仕事時間は不規則になり、勢い、それは生活の不規則さにもはねかえる。」という文では、副詞的に使われている。本稿では、こうした、前文の一側面を切り出し、それを後続文に取り込む働きをする語「実際、事実、勢い、結果」について、その用法、品詞的位置づけを考察した。また、あわせて、こうした語の中から「実に、実は、実際、実際は」等について、非母語話者の誤用を検討した。

キーワード：名詞の接続詞的用法、名詞の副詞的用法、実に、実は、実際

#### 1 はじめに

「勢い」「事実」「実際」という語には、次のような用法がある。

- (1) 相手あつての仕事だから、相手の都合にあわせてどうしても滋子の仕事時間は不規則になり、勢い、それは生活の不規則さにもはねかえる。(宮部みゆき『模倣犯』)
- (2) つまり若い人の心筋梗塞が頻繁におこる地域は食生活に問題があることが多く、事実、私たちの調査でもそのような地域ではまず長寿はありえませんでした。(家森幸男『カスピ海ヨーグルトの真実』)
- (3) 近藤守は何度も聞いた小喃を聞くかのように、うんざり気味だった。実際、彼はその報告を何度も聞いているはずだった。(ゴールデン)

この「勢い」、「事実」、「実際」は文の中でどういう働きをしていると言えるだろうか。もとは名詞だが、ここでの働きは名詞ではなく、副詞的である。これらの語を主題化することはできない。

- (1)' \*勢いは生活の不規則さにもはねかえる。
- (2)' \*事実は私たちの調査でもそのような地域ではまず長寿はありえませんでした。
- (3)' \*実際は彼はその報告を何度も聞いているはずだった。

(3)'は、文法的には成立するが、(3)の「実際」は「現実に」に近い意味だから主題化した名詞の「実際は」とは意味がずれる。また、(1)～(3)の中で「事実」を用いた(2)は、以下のように名詞述語文に変えることができる。



そして、先行して、否定、仮定の予告をする働きがあるから、これらの語は「表現の本体は後続する部分にあり、その後続する本体を予告しそれを誘導する」機能が重要である。

こうして渡辺は、いわゆる陳述副詞を「誘導副詞」と呼びかえ、さらに、この働きは、従来副詞と考えられてきたものの中に、かなり幅広く認められるとして、「決して」「もし」のような呼応表現だけでなく、一つの注釈内容を意義として担い、それを表示しつつ、後続する注釈対象を誘導する語も誘導副詞に含めた。そこに挙げられている語は、「もちろん、無論、事実、実際、幸い、あいにく」で、ここには冒頭にあげた「事実」「実際」が含まれている。すなわち、渡辺は、「事実」「実際」を後続する注釈対象を誘導する語として誘導副詞の中に位置付けている。たしかに、従来の陳述副詞も、叙述の内容自体に関与しない点では、「事実、実際」等と働き方は共通するが、呼応する部分の有る無しに関しては明らかに違いがある。竹内（1973：140）は、「注釈誘導の副詞は、陳述副詞のように、陳述内容と呼応するものではなく、陳述によってとのえられた句（山田博士のいわれる意味での）に対して、それを注釈する関係で対応しているのである。陳述副詞のはたらきが、句の中でののはたらきと認めうるのに対して、注釈誘導の副詞のはたらきは、句の外から句へ向けられるものと考えるのが妥当ではあるまいか。」と述べ、両者を分けている。

益岡・田窪（1992）は、「陳述の副詞」を「文末の「ムード」の表現と呼応する副詞」に限定し、たとえば、疑問と呼応するもの（「いったい、はたして」）、否定と呼応するもの（「決して、必ずしも」）、依頼・命令、願望と呼応するもの（「ぜひ、なんとか」）のように分けている。そして「陳述副詞」とは別に、「評価の副詞」「発現の副詞」をたて、前者は「当該の事柄に対する評価を表す副詞」、後者は「当該の発言をどのような態度で行うかを表す副詞」とした。それぞれ次のような語を例としてあげている。ここでは「実際」は「発言の副詞」に入っている。

「評価の副詞」 あいにく、さいわい、当然、もちろん、むろん、偶然、たまには  
「発言の副詞」 実は、実際（は）、言わば、例えば、要は、概して、総じて

これに近い名付けが、中右（1980）によるもので、中右は、副詞を命題の一部を形造る「命題内副詞」と 命題に対するモダリティを表明する「命題外副詞」に大きく分け、このうちの命題外副詞に「発話行為の副詞」をたてる。そして、「発話行為の副詞」は、モダリティの副詞に入るが、「他のモダリティの副詞から区別される明確な点は、それが命題内容そのものにかかわるというよりは、むしろ、命題内容の提示の仕方にかかわるということである。つまり、命題内容をどのように述べるか、話者自らの発話の仕方に制限を加えるという働きをもっている。」（1980：206）としている。これは、冒頭の(1)～(3)の「勢い、事実、実際」の働きにもあてはまるものだが、中右は文副詞を扱っているので、発話行為

の副詞としてあげられている語例は、「ついでながら、ちなみに、要するに、たとえば、率直に言って、本当のところ、つまりは、ものは相談だが」といった句相当のものである。

水谷・星野(1994)は、名詞から副詞にわたる語類を、約1万の実例をいくつかの目安を立てて分類し、その多様性の実態を明示的に示した。「実際」は、水谷・星野の分類では「名詞中核 副詞法あり」に含まれる。この分類に含まれる語の特徴は、「格要素に立ち得る」こと、「独立用法で(つまり「これ以上」「三日間」のやうな複合でなく)情況化の助詞に助けられず副詞法を有する」ことにある。ただし、独立用法は、その分類に含まれるすべての語にあてはまるわけではなく、語によっては「二」によって副詞化するものも含まれている。ここであげられている語は、「実際」「勢い」「結果」のほかに、「是非、単身、一見、結局、時折、以上、将来、今日、当初、挙句、一面、早々」などである。分類の基準が文法的性質であるため、意味的には「将来、今日、当初」のように「とき」を表すものや、「単身、一見」のように「さま」を表すものが混在している。

結局、従来の分類では、ここで扱おうとしている語は、誘導副詞の一部(渡辺)、注釈誘導の副詞(竹内)、発言の副詞(益岡・田窪)等として扱われており、また、水谷・星野による分類では、名詞用法があり、かつ副詞の独立用法を持つことがその特徴としてあげられている。なお、市川(1965)は、接続詞的な用法を持つ副詞を取り上げた論考だが、その中で、本来は名詞の「実際」「事実」に、接続詞的な用法が見られると指摘している。

### 3 独立副詞用法「事実、」「実際、」類の性格

従来の分類分析では、「X 事実、Y」「X 実際、Y」は、後続の Y という発言をどのような態度で行うかを示すものという解釈だった。しかし、用例を見てみると、後続文の導入だけがその働きではないように思われる。

- (5) しかし、それは古の知恵の再来であり、現代の科学の追認するところでもある、事実、この雪室の建築にあたり、町の関係者は某工業大学と密に連絡を取り合ったという。(石川文康『そば往生』)
- (6) さらに、この時期のヨーロッパにおいてはパスポートの制度は廃止されるか、有名無実化し、今日以上に人的通行は自由だった。実際、第一次世界大戦前のヨーロッパで暮らす人々にとって国境に対する意識は驚くほど薄かった。(国際)

上の例において、前文脈なしに「事実、」「実際、」から文がはじまるのは不自然で、前文 X は不可欠である。これは、「事実、」「実際、」が後続文を誘導するだけでなく、前文の一側面を切り出し、それを後続文に取り込んでいるからだと考えられる。こうした働き

をする語として、ここでは「実際、事実、勢い、結果」を取りあげる。「一面、反面、一方」は、後続文と前文の関係が対立関係にあることを示す標識で、ここで取り上げる語群に近いが、論理性が強い点で接続詞に近い。また、前文全体、あるいは、前文の時をとりあげる「以上、以来、以後」などは、前文がこれらの語の構成要素に含まれているという点で、もはや接続詞と言ったほうがいだろう。ここで取り上げる「実際、事実、勢い、結果」に共通する特徴として、以下の4点があげられる。

- 1) 名詞であると同時に、副詞の独立用法を持つこと。  
もともとこれらの語は、次の例にもあるように名詞である。

- (7) 理論と実際を学ぶ
- (8) 事実がわかったら知らせてください。
- (9) なぜ青信号は、実際は緑なんですか。

(9)の「実際は」は、益岡・田窪（1982）では副詞として扱われている。しかし、名詞を主題化したこの句全体は、いまだ副詞にはなっていないように思われる。「実際は」には、次の例のように「～でなく、実際は～」「～（た）が、実際は～」といった主題の対比用法も多い。

- (10) 大宝令では一反の面積が 360 歩に決まったが、実際は前から決まっていた数値を公式に追認したらしい。（石川英輔『ニッポンのサイズ』）

また、抽象的な内容の語なので、名詞として使われる場合は連体修飾を受けることが多い。

- (11) 染織工芸や金工工芸でも、工芸技法の実際を学ぶことができる。（久世健二『全国大学学部・学科案内号』）

しかし、「実際、事実、勢い、結果」は、名詞であると同時に副詞的にも用いられる。

- 2) これらの語は、述語を修飾して述語の情報量を増やすということではなく、後続文全体、そのあり方にかかる。そのため、一部の語については、先にも述べたように、これらの語を底とする名詞述語文が作れる。

- (12) 事実、来た人はだれもいなかった。→ 来た人が誰もいなかったのは事実だ。

- 3) 発話される時、語の後にポーズが置かれる。また、語尾のイントネーションが若干上昇する。平板型の単語ではその点は顕著に表れないが、起伏型のアクセントを持つ「勢い」の場合には、この用法では平板型になる。

(13) (名詞) いき<sup>↑</sup>おいがいい。

(14) (副詞) いき<sup>〰</sup>おい、みんなが賛成することになった。

- 4) 時の副詞にくらべて前文の必要度が高い。また、後続文全体にかかるため、いわゆる陳述副詞のように特定の述語と呼応することはない。

ここで取り上げている語の前文の取り込み方はさまざまである。以下、用例をもとに具体的にみていく。

○前文の一側面を後続文で示すという標識。

この例には、「実際、事実」があげられる。

「X 実際、Y」では、X の、もしくは X に関連する具体例が Y に来る。Y が疑問文でもいい。一つの具体例、根拠をあげるという点で、次の例にみるように「本当に」に近い意味ももつ。

(15) 「テレビ観ないんですか」

「飽きた」

「まだこれからじゃないですか」

実際、田中徹はまだまだこれからだと思っていた。(ゴールデン)

「X 事実、Y」は、X の証拠を Y にあげるという標識で、「その証拠に」といった意味に近い。多くの場合「事実」と「実際」は置きかえが可能だが、Y は事実であることが必要で、仮定の話や疑問文は来にくい。以下の用例で下線は原文のものを示す(以下、同様)。

(16) 「そば博覧会」という全国規模のイベントを開催するには、いささか小規模な集落である。{事実・実際}、人口 4000 人の過疎地帯である。(石川文康『そば往生』)

(17) ……たちまちマラリアの患者数は増加することが考えられる。{事実・実際}、そのようなことは各地で観察されている。(角田義一・国会会議録)

(18) 死ぬときは一緒に死のうネ」というのが妻の口癖であった。{実際・\*事実}、自分としても病弱の妻を残しては死ねない。(川一『癌は、神様から届いたプレゼントだった』)

- (19) ところで {実際・\*事実}、麻雀には運不運以外に、明らかな実力というようなものってありますか。(Yahoo!知恵袋)

○前文のことがらの経緯、内容を受ける。

この例には、「勢い、結果」があげられる。

「X 勢い、Y」は、X の推移の仕方に注目し、それを Y でとりあげる標識となっている。

「X の流れで」といった意味になる。

- (20) 当然、私と部下は私という強烈な個性を持つ「家長」に率いられた擬制家族になる。  
勢い、仕事も遊びも一緒だ。(小林潔『ガサ!』)
- (21) 女は廊下の突きあたりにある戸棚から、寝具と蚊帳を運んで来た。勝次は、勢い、女が床をのべるのを見守る格好になった。(笹沢佐保『紀州ミステリー傑作選』)
- (22) この際とばかり、いかなる余りものも見逃すものかと興奮していた。勢い、ナイフを持つ家長の近くへ近寄りすぎたりする。(畑正憲『ムツゴロウの動物交換術』)

「X 結果、Y」は、後続文に X の結果が来るわけで、もし「その結果」とすれば、接続詞の働きであり、述語を取り込んで「する結果」「した結果」と従属節を作ることでも可能である。また、「結果」の後続文は、文字通り前文の結果になるので、次の(23)～(26)の例のように「結果は」と主題化することが可能な場合も多い。

- (23) 民主党は左派の活動家の面々、共和党は右派のティーパーティーの人たちの顔色をうかがうばかりだ。結果、一方は「増税反対」を掲げ、他方は「財源確保」を叫び、予算一つすらまとめられない状態が長く続いた。(日経 2013.3.11)
- (24) こんな状態の毎日でした。入社したばかりの頃は夢も希望もありましたが、しばらくしたら、うつ病の薬が増えるコトになってしまいました。結果、本日退社。これから、またしばらくの間、自分自身を見つめ直そうと思います。(Yahoo!ブログ)
- (25) この日もいっさい釣り糸は垂れず、ウグイ集めだけに従事した。結果、クーラー・ボックスはあっという間に満杯に。(Yahoo!ブログ)
- (26) したがって、当地の人々はいきおい屋内で過ごす時間が多くなる。結果、家庭内で可能な外部とのコミュニケーション、すなわち通信に対するニーズが高くなる。(中野明『腕木通信』)

ただし、次の例のように、「結果」の前文と後続文が因果関係にない時には、「結果」は主題化しにくい。

- (27) 都内のラジオ局の送信アンテナは、東京都内か千葉県にあります。充分受信範囲ないです。{結果、・\*結果は} 病室の壁がラジオの電波を遮へいしていると思われま  
す。(Yahoo!知恵袋)
- (28) 市民税は時期になれば勝手に自宅に支払い用の綴りが届きます。{結果、・\*結果は}  
届く綴りは国民年金、国民健康保険、市民税の3種です。(Yahoo!知恵袋)

#### 4 接続詞との異同

市川(1965)は、「たとえば、さらに、また、なお」といった語を取り上げ、それらを副詞と考えるべきか、接続詞と考えるべきかについて考察している。そこには以下のような例があげられている。

- (29) この問題はさらに検討を加える必要がある。
- (30) 風がはげしく吹きつけた。さらに、大粒の雨まで降りはじめた。

市川は、(29)の「さらに」は「検討を加える」を修飾する点で副詞、一方、(30)の「さらに」は、接続詞としている。市川は接続詞を「二つの表現(文・節・語句)の中間に位置して、両者を対立させ、その関係を示すことによって、二つの表現を接続する」と定義するが、その働きを(30)の「さらに」が持つにもかかわらず、これを完全な接続詞とは見なさない。それは、(30)と同時に(29)のような例が存在することから、(30)のような場合でも、対立関係を構成する機能には限界があるからだと考える。

ひるがえって、小稿で取り上げている語はどうだろうか。「実際、」も「事実、」も、前文の内容を受ける点では接続詞の働きに近い。接続詞は、XとYの関係のあり方を示す語で、指示詞の「ソ」や形式動詞の「スル」を構成要素とするものが多く、この部分によって、前文Xの内容が示される。また、語としての独立性が高く、接続する文の要素に制限がない。副詞と接続詞の働きが近いことは確かで、芳賀(1982)は、「しかし、だから、また、あるいは、そして、かつ・・・」など、従来接続詞とされてきたものを、「承前副詞」と名付け、副詞に含めている。しかし、接続詞は前後の論理関係を示し、たとえば、「しかし」「そして」という語だけで、その前後の文の論理関係は理解される。ここで扱っている一群の語は、Xの一側面を示すという点に、いまだ名詞の実質性を残している。先の市川の考え方に倣えば、名詞としての用法を持つ点でその接続詞性には限界があると言える。ここでとりあげた語は、機能的には接続詞の性格も持つが、接続詞になりきってはならず、いまだ名詞の性格も残している点で、名詞の副詞的、接続詞的用法と考えるのが妥当だろう。

## 5 なぜ後に「ニ格」をとらないのか。

副詞には「ニ格」「ト格」をとるものが多い。ここで取り上げた語は、「実際」を除くと「ニ格」をとらない。

- (1) \*・・・勢いにそれは生活の不規則さにもはねかえる。  
(2) \*・・・事実に私たちの調査でもそのような地域ではまず長寿はありえませんでした。

これは、「ニ格」をとれば次のように名詞性が示されるからだろう。

- (31) 事実に相違ない。  
(32) 勢いにかげりが見られる。

しかし、こうした中、「実際」だけが、「ニ格」もとる点で他の語とは異なるふるまいをしている。「実際、」と「実際に」の違いはどこにあるのだろうか。

- (33) あんたは犯人じゃねえと俺は思っているし、{実際、・実際に} そうなんだろうよ。  
(ゴールデン)  
(34) 昔に戻ろう、とポール・マッカートニーが {実際、・実際に} 願っていたのかどうかは分からないが、青柳雅春はまさにそんな思いで、「あの時に戻らないといけない。あの時の仲間を助けなければならない」という一心で、歩みを進めていた。(ゴールデン)  
(35) 僕みたいなおじさん世代も一応、英語に接しておいた方がよいと思ったのだが、{実際、・実際に} 勉強してみると結構大変だ。(日経 2013.2.18)

上の(33)~(35)の例では、「実際、」「実際に」のどちらを使うことも可能だろう。しかし、以下の(36)~(38)の例のように、直後の述部が連体修飾節におさまり、かかりが直後の述部に限定される場合には、「実際に」のほうが自然である。

- (36) 片桐さん、{\*実際、・実際に} 闘う役はぼくが引き受けます。(村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』)  
(37) ホームヘルパーと言う仕事に興味があります。{?実際、・実際に} 働いている人からの意見や給与、時間などの待遇などが知りたいです。(Yahoo!知恵袋)  
(38) 株を {?実際、・実際に} 買ってみよう。

以上、名詞でありながら副詞的にも接続詞的にも機能する語のふるまいをみてきた。

「その結果」「その証拠に」といった副詞的接続詞的表現が可能でありながら、あえてそうした言い方をせず、「結果」、「事実」、「実際、」といった、名詞をそのまま副詞的に用いる点がここで取り上げた語の特徴である。ただし、前文のどういう側面を取り出すかについては、その語の持つ意味によって違いがある。いずれも話しことばで使われることが多いようだ。これは、名詞の言い切りによる口跡のよさ、それによる躍動感が好まれるためかと思われる。

以下では、日本語学習者にとって、この中でも誤用が目立つ「実際」「実」を取り上げ、その原因と用法を考えてみる。

## 6 日本語学習者にとっての問題点

「実際」に関する誤用は、使わないがための誤りや、使うべきところに他の語を使うという誤りもあってその原因が特定しにくい。しかし、「実」と「実際」の区別は、学習上重要と思われる。

- (39) しかし、日本語の「あなた」をどう使えば適当なのだろうか。実に、「あなた」は昭和の初めごろまで目上の人にも使える敬称であった。(中国：外大)
- (40) 私の初めてのクリスマスは大学生の1年生の時、クリスマスの前の日、皆お互いにリンゴを贈った。なぜリンゴを贈るのか、外国でもリンゴを贈るのか、あるいはこれが実にビジネスの操作の結果なのか、本当に分からない。(中国)
- (41) クリスマスとは、もともとヨーロッパの伝統的な祝日である。実は19世紀にクリスマスはもう中国に伝わってきた。(中国)

どの例も本来何を使えばよかったのかは判断に迷うが、「実に」「実は」の意味、使い方が誤解されているようではある。「実は」は語構成上は名詞用法だが、「実際は」とは異なり、完全に副詞化し、意味が以下のように「隠していたこと、気づかれていないことを明かす」ことになり、文字通りの意味とは異なっている。

- (42) この間、丸善の社長さんに会ったので、「実は・\*実際は} 私は、東大を出たときに、丸善に入ろうと思ったことがありますが、・・・」(細川隆元『男でござる』)
- (43) {実は・\*実際は}、ご相談したいことがあるんですが。
- (44) 『実は・実際は} 悲惨な公務員』(書名)

(44)は、「実は」「実際は」のいずれも可能だが、「実は」のほうが読者の知らないことを明かすという意味合いが強く、一方、「実際は」は客観的叙述で、本のタイトルとしては、印象が弱い。「実は」は、「本当のことを言えば」と言いかえることができ、意味からすると複文的である。しかし、こうした点が学習されれば、日常的に使われる語で学習者の間違いは少ない。「実に」も副詞用法だが、学習者は、「本当に」と理解している場合がある。「実に」は次の例のように、状態性の述語の程度や数を修飾する場合に用いるので、その点への注意が必要である。

- (45) 実に {難しい、興味深い、つらい、うまい、ばかばかしい、楽しい、様々な}
- (46) 今の時点では、実に 60 通以上のメールが届いている。
- (47) この工事には実に 50 年の歳月を費やした。
- (48) その実に 半数が退職者。

「実に」は修飾語、「実は」は状況語と言え、さらに「実は」は、「実際」より副詞化が進んでいる。表 1 は、「実際、事実、勢い、結果」の 4 語と「実」について、文中での用法を比べたものである。

表 1 文中での用法比較

用法	実	実際	事実	勢い	結果
一の	△	○	○	○	○
一は	△	○	○	○	○
一に(副詞用法)	○	○	-	-	-
一だ(名詞述語用法)	-	○	○	○	○
独立副詞用法	-	○	○	○	○

「実際、事実、勢い、結果」の 4 語は、「の」「は」で受けることができ、また、名詞述語用法がある点でその名詞性が明らかである。「実」にも名詞的用法がないわけではないが、「実のところ」のほか、「実の娘」「実の親」といった血縁関係を示す場合がほとんどで、形容詞的用法に限られている、そして、「実は」「実に」は副詞化している。すなわち、「実」には名詞の実質性が乏しく、そのことが「実」の副詞化を進ませていると考えられる。それに対して「実際、事実、勢い、結果」の 4 語は、名詞性が明らかで、加えて小稿で見えてきたように独立副詞用法をもつ。中で「実際」は二格の副詞用法も併せもつ。

「実際」と「実際に」は、先に述べたように、文中でのかかり方が異なるが、「実際は」と「実際には」は、ほぼ同じように使われる。「実際に」と「実際には」とでは、「実際に」は述部との結びつきが強く(用例(51))、一方、対比的に示されるときには「実際には」のほうが自然である(用例(52))。

- (49) (彼は生きているとは名ばかりで) {実際は・?実際に・実際には} 死んでも同然だ。
- (50) 彼は自分では貧乏だと言っているが、しかし {実際は・?実際に・実際には} 非常に金持ちだ。
- (51) この領域はウィニコットが {\*実際は・実際に・?実際には} 行った臨床的なやりとりとほぼ平行である。(妙木浩之『精神医学の名著 50』)
- (52) ビューッととぶのだと思ったのは、まだ移動になれていないからで、{実際は・?実際に・実際には}、ビューッとにもなく、いっしょんで目的地にとうたつていた。(かんべむさし『ざぶとん太郎空をゆく!』)

なお、「実に」が状態性の述語を修飾するように、「実際」にも状態性の述語を修飾する例があるが、「実に」が状態性用言の程度を強めるのに対して、次の例にみるように、「実際」は、本当らしさを強めていると言える。

- (53) 彼はいつもにも似ない悄然とした口調で、自分の弱い人間であるのがじっさい 恥ずかしいと言いました。(夏目漱石『こゝろ』)
- (54) 彼は学問が好きだと言っている、また実際できる。

## 7 まとめと今後の課題

奥田靖雄(1984:37)は、副詞について、「副詞は構文論的にかたちづけられているとしても、形態論的にはかたちづけられていない。したがって、副詞の構文論的な内容は、その語彙的な意味のなかにとけこんでいる。あえて、副詞の構文論的な機能の特徴づける形態論的なしるしをもとめるとすれば、単語つくりの方法がうかびあがるだろう。名詞や形容詞や動詞の形態論的なかたちのうちのひとつが、機能の特殊化の結果、語彙的な意味の変化をともないながら、副詞へと移行してくる。」と述べている。この小稿では、もとは名詞であった語の中で、前文の一側面を切り出し、後文につなげる働きをするものに注目し、その働き方を少し具体的に見てみた。ここで取り上げた語群は、奥田が指摘するように、もとの意味を残しつつも、前文と後文の間におかれて、その意味を広げ、構文的にも新たな機能を担っている。最後に、「実」「実際」に関して、日本語非母語話者の誤用を検討した。こうした語のふるまいが通時的に変化しているかどうかを探ることを今後の課題としたい。

## 用例出典

Yahoo、国会議事録とともに、著者名、本のタイトルを示した用例は、国立国語研究所公開コーパス BCCWJ の「少納言」からのデータである。また、非母語話者の作文例には、国籍を

記したが、「外大」とあるのは、JLPTUFS 作文コーパス（東京外国語大学留学生教育センター教育研究開発プロジェクト 2011 年 3 月）のデータである。無記入は作例、その他は以下が出典である。

日経：日本経済新聞

ゴールデン：伊坂幸太郎『ゴールデンスランバー』新潮文庫

国際：中西寛『国際政治とは何か』中公新書

### 参考文献

市川孝（1965）「接続詞的用法を持つ副詞」『国文』1号 お茶の水女子大学国語国文学会

奥田靖雄（1984）「言語における形式」『ことばの研究・序説』むぎ書房

竹内美智子（1973）「副詞とは何か」『品詞別日本文法講座 連体詞・副詞』明治書院

中右実（1980）「文副詞の比較」『日英語比較講座第2巻 文法』大修館書店

芳賀綏（1982）『新訂日本文法教室』教育出版

畠郁（1991）「副詞論の系譜」『日本語教育指導参考書 19 副詞の意味と用法』国立国語研究所

益岡隆志・田窪行則（1992）『基礎日本語文法 改訂版』くろしお出版

水谷静夫・星野和子（1994）「名詞から副詞まで 一語類の新しい枠づけ」『計量国語学』19 卷7号 計量国語学会

渡辺実（1971）『国語構文論』塙書房

（さえぐさ れいこ 法学研究科教授）